

医者 井戸を掘る

中村 哲 著

昨年6月から 一年間の記録

著者は三日の衆院特別委で、参考人としてアフガニスタン状況の証言をおこなったさい、なみいる議員を前に「自衛隊の派遣は有害無益である」といき

書籍 紹介

その著者が、「二〇〇〇年六月から始まったアフガニスタン大干ばつに対するPMPS（ペンシャール会医療サービス）の、一年間の苦闘の記録」として、アフガニスタンでの井戸掘りの状況を報告



したがこの本であり、もっとも最新のアフガニスタン情勢、人民の生活状況がべられてい

る。二〇〇〇年夏から、ユーラシア大陸の中央部は未曾有の大干ばつに見舞われ、六〇〇〇万人が被災した。なかでもアフガニスタンの被害は大きく、人口二〇〇〇万のうち二二〇〇万人が被害をうけ、四〇〇万人が飢餓に直面しているとみ

られる。著者は「まえがき」で、このべている。「問題は医療以前であった。飢餓で栄養失調になった上、半砂漠化して飲料水まで欠乏す

る。著者の「まえがき」で、じゃまになる、という状況のなかで、孤立無縁の戦いをどのようにすすめているかという報告である。干ばつの結果、難民が増

著者の井戸掘りは、現地住民の役に立つかどうか基準であり、「セメント製の井戸枠は、粗悪な既製品の購入はさけ、独自で生産」するなど、必要なものはつくってでも水を住民の生活に届けるというやり方である。現地の実際にあわせた工夫の数々や、また失敗もありのままにえがかれ

四〇〇万人、飢餓に直面

アフガニスタン 大干ばつと戦乱で

米欧の北部同盟への後押しによる戦乱にくわえて干ばつという困難に直面し、さらに二〇〇一年二月の「国連制裁」発動で人民生活状況は悪化するばかりであっ

た。アメリカや日本は、こうしたアフガニスタン人民にミサイルや爆弾の雨をふらし、いっそうの苦難をしいているのである。

飲み水を確保して住民の生存を保障することが急務であった。こうして著者は、医療活動を一時おいても、井戸を掘ることに力を投入する

えがかれている。「この混乱に乗じて、反タリバン勢力が軍事攻勢に出れば、悲劇は倍加する。事実、グラエ・ヌールでは、これを裏書するように、マストードの勢力がタリバン政府と交戦をつづけた」「まともな物をつづけた」「まともな物資輸送などおぼつかない

い、人もいない、カネもない、日本政府や国際機関の「援助」は名目だけで逆に

国連の「援助」は名ばかりに

具体的である。これにたいし、国連の組織や欧米のNGO（非政府組織）などによる「援助」がどのようなものかも、よくわかる。

国連が関与する水事業の事態はどうか。「何れも自



巨石に直面しながらの井戸掘り作業

分の手で掘るのではなく、アフガン人業者に委託するのが常であった。……ひどいものでは、ポンプだけ設置して外観は立派でも、殆ど掘削してないものまであった。また「所有権や登録番号ばかりにこだわ

純朴な信仰心をいざく人々

また、タリバンにたいする制裁が、いかに現地の実際からかけはなれているか、タリバン政府をささえる現地住民が干ばつで打撃をうけるように、「国際社会」がしくんでいった事実を浮き彫りにしている。「もともとタリバンは、農村を基盤とする政權で、僅かな軍隊で国土の九割を治め得たのも、農村の慣習法に基づく政策を貫いてきたからである。……国際社会にとって重要なのは、タリバン政權の弱体化であった、数百万人の生命など瑣末の出来事であった」と。

（石風社、四六判、二八三ページ、一八〇〇円）